

介護職員自己評価表

2021年11月2日

事業所名	定期巡回・随時対応型訪問介護看護きいれ (認知症ケアチーム)		正社員	非常勤社員
		看護師 認定特定行為業務従事者	2人 5人	2 1
		介護福祉士 実務者研修修了者	8人 人	5人 1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備 考
前回の課題に関する改善	13. 6%	56. 8%	17. 0%	12. 5%	

前回の改善計画	認知症ケアが必要なご利用者が多く、①自立支援につながる生活リハビリの実施、②事例検討を踏まえた転倒リスクの教育、③適切な医療連携、④スタッフとの定期的な面談と相談し易い環境整備、⑤経験の長いスタッフによるOJTの実施を計画した。在宅で暮らすご利用者の健康管理を徹底し、フィジカル・ディスタンスングを保ったうえで支援を行った。スタッフは健康管理とPCR検査等で感染予防の徹底を図っている。また、独居のご利用者が殆どで、日頃の暮らしを写真や動画に収めて、ご家族に近況報告を添えて定期的にお届けしている。スタッフの業務負担は、ミーティング・スーパービジョンやこまめな会話を行之い、負担の解消を図ったうえで、個別事情に応えられる業務シフトをスタッフと一緒に検討した。
前回の改善計画に対する取組み結果	自立支援につながる生活リハビリは、実践経験を積んだスタッフと若手スタッフが一緒に行うことでスキルの習得を目指した。転倒リスクは、訪問リハビリの理学療法士と連携し転倒リスクの評価と適切な支援に関する勉強会を行った。医療連携は、バイタルサインを活かしたAIアラートシステムを導入し適切な医療連携を目指した。スタッフの業務負担は、ちょっとしたミーティングやスーパービジョンを活用し、個別事情に応えられる業務シフトを検討した。ご利用者と会話をする時間を増やし若手スタッフの認知症ケアのスキルアップを図った。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	12. 5%	50. 0%	25. 0%	12. 5%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	37. 5%	25. 0%	25. 0%	12. 5%	100%
SECTION 3	食事について	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 5	排泄について	12. 5%	50. 0%	25. 0%	12. 5%	100%
SECTION 6	入浴について	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	12. 5%	50. 0%	25. 0%	12. 5%	100%
SECTION 8	服薬について	0. 0%	75. 0%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 9	意思疎通について	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 10	行動障害について	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	12. 5%	62. 5%	12. 5%	12. 5%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	身体介護のなかに自立支援につながる生活リハビリを組み入れ提供した。排泄介護では、立ち上がりなどの協力動作を促したが、立ち上がる意欲が引出せなかった。本人の意欲が湧く声掛けが問われた。支援をしながらの会話を難しいと感じるスタッフが多く、主任によるOJTと事例検討により解消を目指した。生活歴を把握し関わる時間を増やしたことで、落ち着きをみせるご利用者が増え、認知症ケアを楽しんでいるというスタッフが増えつつある。ご利用者の適切な医療連携としてバイタルサインを活かしたAIアラートシステムを導入した。ご利用者のバイタルデータが連携医療機関と共有できることで医師や看護師等への連携が早まり、体調変化の管理・把握が容易になった。一方で、バイタルサインに関する捉え方に違いがあり、看護師等を交えた実践的な勉強会が求められた。ご利用者の日頃の暮らしや日頃の姿を伝える取組みを評価するご家族の声が多く聞かれ、ご家族の想いに寄り添える更なる取組みが求められた。
主任 大坂高広	

外部評価者	コロナ禍でフィジカル・ディスタンスングを保ちながら認知症ケアを行うことは難しいことも多いと思います。療養生活の支援と認知症ケアが求められる利用者を多く抱えるこちらの事業所は、バイタルサインの適切な管理と医療連携の重要性が高く、定期巡回・随時対応型訪問介護看護として介護・看護サービスを提供されています。体調管理と医療連携を補完する仕組みとしてバイタルサインを活かしたシステムを導入し、バイタルデータを連携医療機関と共有し適切な医療連携を心掛け、異常値のAI検知を活かして医師や看護師等との連携を早めているようでした。スタッフのスキルアップを目指して、看護師や理学療法士を交えた勉強会を定期的に行い、医療連携と転倒リスクについて事例検討し改善につなげていました。これらの取り組みは評価できます。一方、自立支援を活かしたケアの提供は、意欲を引出せず、協力動作が得られていませんでした。一部のスタッフは、時間内に行う支援が多いと感じている傾向もあり、難しい対応を求められた時のバックアップ体制に不安を感じていました。支援をしながら適切な会話が行える業務量とバックアップ体制について検討する必要があります。総合的な評価は、適切なスタッフ教育が実施され、医療と介護が適切に連携されていました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。
〒891-0141 鹿児島市谷山中央 5丁目37-10-302 特定非営利活動法人かごしま福祉関係研究所 社会福祉学博士 岩崎 房	

